

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520439

研究課題名(和文)旧満洲地域の都市歴史文化地図シリーズ第一分冊「大連、旅順編」の制作

研究課題名(英文)Production of the first volume "Dalian and Lushun" of city history culture atlas series of the Manchuria area

研究代表者

木之内 誠 (Kinouchi, Makoto)

首都大学東京・人文科学研究科(研究院)・教授

研究者番号：50195327

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：近代百年を通じてロシア、中国、日本の諸勢力がせめぎあい、多元重層的な文化の場を形成した植民都市大連の過去、現在を景観のうちに透視し、ここに生きた人々の場所をめぐる集合的な記憶を都市文化の未来への展望につなぐ歴史地図を制作した。

各種の旧地図などの歴史的な文献資料と、現地調査結果を総合して描かれた立体鳥瞰図的な多色表示による、五千分の一縮尺を基本とした二十枚ほどの区分図によって、この地図は構成される。建物の建造年代別の色分けや道路の起伏の表示など、現地を歩く利用者にとって使いやすい、直感的な了解をたずける可視化の手法を追及した。

研究成果の概要(英文)： This study produced historical maps of Dalian. Dalian is a colonization city where the influence of Russia, China, and Japan contended with each other through modern 100 years, and it formed a multilayered place of pluralistic culture. We tried to see through past and present of this city on the landscape, and expected to combine the collective memory about the place of the people who lived in Dalian with the prospects to the future of the urbiculture of this city.

The atlas is constituted by about twenty subdistrict maps based on the 1/5000 scale. It is based on historical documents, such as various kinds of old maps, and the field survey result, and was drawn by three-dimensional bird's-eye view-like polychromatic indication. In this study, we investigated technique of the visualization to help the intuitive comprehension that easy-to-use for the user who walks along a spot including the indication color-coded by age of buildings and the ups and downs of the road, etc.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学 ・ 各国文学・文学論

キーワード：歴史文化地図 大連 満洲国 植民都市

様式 C - 19、F - 19、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 人文諸科学を通底する一般的な問題関心としての、空間性ないしトポス、その記憶をめぐる関心は、文化研究の各領域にあってもとみに高まりつつあると考えられた。

文学研究の領域にあっても、広い意味での文学的な諸活動の背景となる都市の文化全体のパースペクティブのなかに位置づけられることによって、連関的な視野の中での新たな発見が期待しうるものと考えた。そして、場所の経験と記憶との関わりを視野に入れることは、その有効な一手段となりえた。当時すでに、台湾の研究者によって、戦後の台湾文学と旧上海の都市記憶の関連など、一連の注目すべき論著が登場していた。

(2) 研究代表者の木之内は、近現代中国文化の一大中心たる都市上海について、『上海歴史ガイド マップ』(1999,大修館書店)を制作刊行し、幸い日中両国の専門的研究者を含む多くの読者を得ることができた。そして、その後生じた上海の都市景観の激変をうけて、その全面改訂版の上梓を計画し、本研究の開始時点で、その作業の完成に近づいていた。これと平行して、ウェブページ上の電子地図版の公開も試行的に開始しており、現地録音データとの融合による音景観の提示など、紙媒体の制約をこえた様々な可能性を模索していた。

(3) 一方、旧日本植民地における文学・文化に関する研究は、東西冷戦の構造が崩壊した1990年代頃からようやく本格的におこなわれはじめ、一定の成果は見られていた。しかし、朝鮮や台湾に比べ、傀儡国家だった「満洲国」についての研究は相対的に貧弱だと言わざるをえない状況が続いていた。

その原因はいくつか挙げることができるであろうが、本研究課題に即していうならば、研究の深化進展にとって基礎的な工具書的性格をもつ資料の整備が遅れていたことが指摘される。このような状況を克服すべく、研究分担者の平石、大久保、橋本らは日中横断的な視点を取り入れて、基礎的で総合的な研究活動を進めてきた。そのなかで、遭遇した困難のひとつとして、歴史的事象を調査・検証する際に、専門家にとって参照価値を有する信頼すべき精度と十分な情報量を持った歴史文化地図が存在しないこと、があげられた。

旧満洲地域の主要都市の建築物や都市計画についての調査研究の成果は、すでに日中双方の研究者による『中国近代建築総覧』シリーズの各編(1992-)や、藤森照信、汪担

監修『全調査 東アジア近代の都市と建築』(1996)などに示されており、また、『図説「満洲」都市物語』(1996)をはじめとする西澤泰彦による一連の著作や、竹中憲一『大連歴史散歩』(2007)など、都市景観の時空的なノードともいうべき場所を丹念に踏査した労作も刊行されていたが、残念なことにこれらの仕事にも、現地を訪ねようとする際に必要となる十分な精度をそなえた地図は付されてはいなかった。

この欠を補うべき、基本的な作業が必要とされていたといえる。

2. 研究の目的

中国近代の文化的形成・発展、あるいは日中関係の来歴を理解するうえで、特異な重要性をもつ旧満洲地域の諸都市について、その過去と現在を透視し未来を展望するビジュアルな工具資料の一つとして、都市の歴史・文化的相貌を示す地図シリーズを作成し、公開することをめざした。

今回、歴史地図制作を計画した大連、旅順などを含む関東州地域は、上海とならんで、二〇世紀の日本人の在外生活史のなかにおいても、きわめて重要な位置を占めた場所である。中国、ロシア、また朝鮮半島の人々の共同体としての記憶が重なりせめぎ合う場所でもある。その多元重層的な文化の相貌を地図の上に可視化し、この地域に対してさまざまな学問的、あるいは実際的な関心を有する人々と共有しうる、多様な時空景観的情報のプラットフォームの一端を構築することが、この研究計画のめざすところであった。

また、一都市の歴史地図の制作という最終目的の達成の準備作業としての、資料データベースの構築も、それ自体として、今後の研究のための基礎資料として構築利用されるべき意味を持つものであると考えた。

今回の研究計画の中では、より長期的な構想として計画される「旧満洲都市歴史文化地図シリーズ」制作の第一段階として、大連および旅順を対象とする作業を計画したが、すでに、「1. 研究開始当初の背景」で述べたように、大連、旅順については、これまでに一定程度以上の詳細さを持った本格的な都市歴史マップは、中国においても日本においても制作刊行されていなかった。本研究計画は、その欠落をうめて、文学史研究に止まらず、日中関係史、都市と建築、あるいは「コンテンツ・ツーリズム」的な関心にも応えうる、多領域を横断する学際的な成果が期待された。

中国の急激な経済的発展につれて、開発行為にともなう旧市街の街並み景観の大規模な改変が、大連、旅順でもいままさに進行しており、清岡卓行『アカシアの大連』

など一連の「大連もの」がノスタルジックに想起した都市のランドスケープも日々失われつつある。また、「満洲国」時期の大連を自らの経験として知る人々の記憶も、いよいよだいに消え去ろうとしている。それは逆説的に人々の「記憶の場」へのこだわりをうながす所以ともなる。

3. 研究の方法

研究計画の実施にあたって、以下の3段階の作業を平行的に順次進行させていった。

(1) 文献収集などの資料調査と整理

国内および中国での、旧地図、文献、先行研究などの収集、調査と整理、分析。関連資料データベースの作成、整備。具体的には、十九世紀末以来の大連、旅順に存在した文化関連を中心とする諸施設や建築物（図書館、博物館、出版社、書店、劇場等）をはじめ、政治、経済、軍事など多方面にわたる歴史的な重要施設や場所、出来事の現場などの所在地情報とその情報源、および新旧の地図資料、商工録など工具書資料類についてのデータベース化を行った。

(2) 実地踏査による現況の把握と検証の作業

文献的な資料整理の作業と並行する、現地での実地踏査による現況把握と検証の作業。現地調査では、地図上に示されるべき歴史性をおびたランドマークポイントについて、境界との関連とともに現況を把握し、これを写真、ビデオ情報等として記録し、蓄積した。各種施設などに関する項目の整理と解説の執筆、関連年表などの執筆制作。

(3) 地図作成作業

上の作業の成果を基礎とした歴史地図の作成および公開の準備。歴史的な情報を現況の地理情報に重ね合わせて、コンピュータ・グラフィックス・ソフトにより歴史地図を作図していった。建造物については、その建造時期によって、疑似3D的描画を施し、臨場感に富む図面とした。これに項目解説と関連年表、索引などを付して、出版物としての刊行をめざすとともに、これを常時更新可能なウェブページ上のマルチメディア情報として公開をめざした。

4. 研究成果

(1) 資料調査、実地調査の実施

大連現地での各種調査

3年間の計画実施期間中に、2011年9月、2012

年2月、同年9月および2013年3月、同年9月の5回にわたりメンバー合同による、大連および旅順、金州地区での現地調査を行い、調査用地図への現場情報の記入、映像による記録をすすめた。

これと平行して、大連図書館、大連出版社、現地古書店などで関連文献資料の調査、収集、購入につとめた。大連近代史研究会副会長の王珍仁氏、大連図書館古籍部副主任の冷繡錦女史ら現地の学術関係者らと交流を進めた。また、中国最大のインターネット古書サイトからも関係書籍を検索して、改革開放期に発行された旧地図類などを購入することができた。

国内の資料調査など

2011年11月には、京都の国際日本文化研究所が所蔵する大連の旧地図資料を閲覧し、コピーサービスにより持ち帰り、デジタルデータ化の作業をおこなった。2012年11月には木之内、大久保が、かつて大連航路の出航地であった北九州市の門司港にある北九州市国際友好図書館に赴き、所蔵する大連関係図書を調査閲覧し、旧大連学校同窓会資料の収蔵状況を調査した。また、2014年2月には、全メンバーにより、旧満洲関係書籍のコレクションを所蔵する山口県の防府市立図書館の関係図書について調査を行った。この折、下関市の赤間神宮内に戦後改めて鎮座された大連神社を訪れ、旧大連神社宮司のご子息として旧大連時代の生活経験をもつ赤間神宮宮司の水野直房氏より貴重な体験談をうかがうことができた。

(2) 基礎的な項目データベースの整備

上記の各種の調査を通じて、集められた資料の本体および、そこから抽出される地図上に記載されるべき項目データの、データベース化の作業が、きわめて重要な基礎作業となった。

具体的には、新旧の道路名、各種機関・建造物などについての項目を選定し、位置情報、建造年代など関連する各種の情報を分類整理して記入していくとともに、新旧の地図資料、関連図書、雑誌論文、関連ウェブページ、画像資料などのデータベース化による整理を同時にすすめた。この基本データベースファイルは、オンラインデータとして各自がアクセスし、各メンバーによる資料データベースの更新に競合・上書きなどの事態の生じないようにした。エクセルファイルとして作成されたこのデータベースは計6枚のシートから構成され、その主要なシートである「directory」シートの記入事項は、コード1、コード2、旧称1、旧称2、旧称3、旧称4、現称1、現称2、

旧建造物存非、旧地番、行政区、現地番、グリッド、経緯度、建造・創設年、設計・施工、資料ソース、記事、作品中の描写言及、資料画像、撮影画像、現地踏査日、入力者・日、の25項目からなる。2013年度末の時点で、このデータベースには、それぞれの新旧の各種の名称を項目としてカウントすると、町名、道路名を含めて総計2100項目が記入されているが、この数字は、大連・旅順両地区の合計の数字として当初想定した約3000項目のおよそ3分の2に達している。

(3) 地図の製作

以上の基本的な資料整理、整備の作業の進捗と平行して、地図の製作作業を進行させた。

地図の作図には、2Dグラフィックスソフトの「Adobe Illustrator CS5.1」を主に使用して、パソコン上でのデジタルデータとして作成していった。旧大連市街の中心地区であった「大広場（現中山広場）」周辺から着手して、5000分の1縮尺による、ベースマップの作図作業を進め、これに街区景観の現況を視覚的な明瞭さを以て示すべく、建造物などの3D鳥瞰図的な表示を試みた。

道路線の記入などにあたり、今回ベースマップ制作の基礎としたのは、現地で市販されている1万分の1の市街地図冊であり、その不正確な点を、現地の実地踏査時のデータや、google earthなどの提供する衛星画像、各種オンライン地図データと照らして訂正し、基図となる道路袋線、道路名、現況の機関名称、建造物などをIllustratorにより記入、描画した。

ついで、この現況の街路景観情報の描画されたベースマップに、順次、各種の資料から収集整理された歴史的な情報を付加して、歴史地図としての完成をめざした。

以下の図1、図2に、今回作成した大連の歴史的街区の発展状況を基礎としたゾーニング案とこれに対応する、本研究計画の全体的進捗状況を示す。



図1 旧大連市街地のゾーニング図

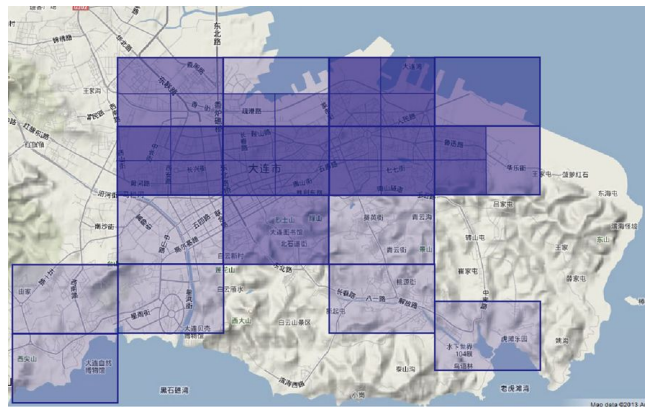


図2 地図作成の進捗の概況（太線で囲まれた四角形は一万分の一図の範囲を示す）

図2に示す進捗状況は、塗りの濃度の最も濃い部分は、地図がほぼ完成している図幅であり、薄くなるほど現時点での完成度が低いことを示す。市街の中心部では、5000分の1縮尺の図を18枚程度でカバーし、周辺部については1万分の1縮尺を基本とし、部分的により大縮尺の図面を用意する。

完成図の一部を以下の図3に示す。

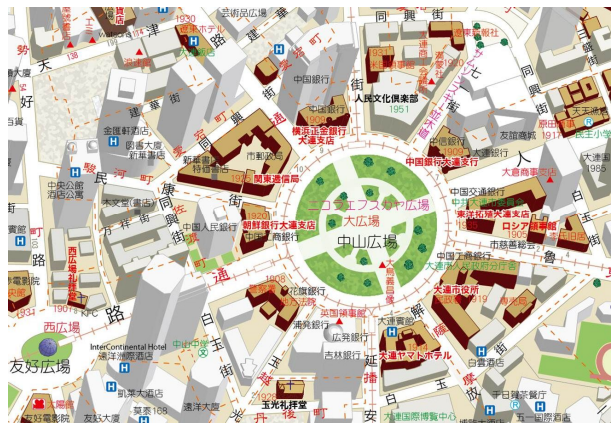


図3 中山広場周辺

中山広場（旧大広場）は、数多くの文化財指定を受けた歴史的建造物に取り囲まれた、大連の歴史的景観を代表する一画である。地図上は、建物や機関の名称を朱、緑、黒の三つの文字色で区別し、日本統治期以前の歴史的名称、それ以降の現在は使われていない名称、現在の名称、にあてて明示した。



図4 東関街周辺にのこる歴史的建造物

上の図3, 図4では、建造物の色の塗り分けを行っている。焦げ茶色は、二十世紀前半までのもの、白色は二十世紀末以来の建設ラッシュの産物、薄いグレーは、そのあいだの共和国建国後から改革開放期までに建てられたとおもわれるものである。大連にあって、中国の他の大都市で見られるような大規模な都市再開発が、この十数年来急激に進み、ロシア時代、日本時代の歴史を感じさせる街並みが見る間に消え去っていった。本研究計画が作成した5000分の1図では、恒常的な建造物の悉皆描画を達成しており、歴史的な街並みの残存状況も、この色分けによって一目瞭然に示されている。これは、在来の地図になかった、ここにはじめて示された独創的な成果といえよう。

かつての上海などの植民地都市では、いわゆる「日本租界」にあっても、道路名とその両側に順に付された番地によってアドレスの表示が行われたのに対し、大連では、日本の都市と同様な、街路と必ずしも対応しない領域としての「町」を基礎とした区画化がおこなわれた。大連都市計画の基礎を残したのは、19世紀末の帝政ロシアであり、そこでは、パリにならっていくつかの広場から伸びる放射線状の街路網を幹線とするプランが実行にうつされた。これと、その後の日本統治期の領域としての「町」による区画は、適格的であるとはいいがたかった。さらには、中国人居住地区では、当初から「町」ではなく文字通り街路名を示す「街」によって都市が分節化されていく。都市の分節化をめぐる、こうした重層的かつ複合的な状況を、歴史地図は可視的なものとして提示することができる。(図5)

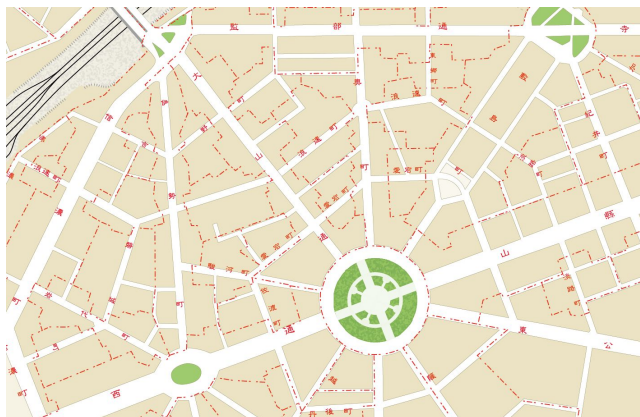


図5 日本統治期の「町」の区画線(大広場周辺部)

地形の起伏を明示することも、大連の都市景観の特質に照らして、この地図計画にとって、重要な達成目標となる。研究代表者がすでに刊行した上海の歴史マップでは、不必要であった、土地の高低、道路の傾斜

についてどのように視覚的にわかりやすく表示するかについて、本計画においてそのいくつかの手法ははまだ試行的な段階にある。図6はその一例である。



図6「伏見台」が俯瞰する「満人街」

完成に近いバージョンの中心部の地図を冊子として公刊する際想定される範囲と縮尺で

プリントアウトし、これをベータ版として、大連現地の研究者あるいは、戦後の引揚げ者である旧大連神社宮司ご子息など、当時の現地の実情を知る方々に示して、地図の記載事項、体裁などについてのご意見をあおいだ。(図7)



図7 ベータ版「大連市街中心部」

建造物の悉皆描画、地形の起伏の表示など、ここで本計画が試みたビジュアルライゼーションの手法は、いずれもひとつ誤ると過剰な図化におちいって、地図のもうひとつのきわめて重要な要素である文字情報の見えにくさにつながってしまう恐れがある。図形と文字の見えやすさという、トレードオフの関係にある二項を、地図の画面のなかでの最適度もとめた調整が要請される所以である。

(4) 今後のまとめ

大連市街地区に関しては、現地調査は基本的に完了している。大連市街地の残った地図の作成を進めるとともに、今後は、さら

に旅順口地区についての補足的な調査と作図作業を進展させる必要がある。そして、地図本編に加えて、これに付す解説、年表等の資料を整備して、今後一年から二年以内をめどに、書籍としての刊行を予定している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 11 件)

平石淑子、『東北作家(群)』研究の現在と今後の課題、日本女子大学史学研究会史艸、査読有、4.巻 54号、pp.72-98、2013年

大久保明男、緬懷與梅娘交往的日子、新文学史料、査読有、2013年第4期、pp.42-47、2013年

橋本雄一、「大東亜」の時間、ネイティブの時間 - 第二回大東亜文学者大会にある対重慶ディスカッション -、東京外国語大学論集、査読なし、85号、pp.1-20、2012年

大久保明男、『満洲報』文芸欄の研究(一) 星期副刊の作家と作品、中国東北文化研究の広場、査読なし、第3号、pp.82-97、2012年

平石淑子、蕭紅・蕭軍の東北脱出、植民地文化研究、査読有、第11号、pp.67-79、2012年

[学会発表] (計 15 件)

木之内誠、大連歴史地図の作成について - 制作作業の実際と現状を中心に、神奈川大学非文字文化資料研究センター2013年度第3回公開研究会、神奈川大学非文字文化資料研究センター、2014年2月15日

大久保明男、「満洲国」における「朝鮮文芸」に関する考察 - 中国新聞・雑誌からの一瞥、第9回植民地主義と文学国際学術会議、韓国・大田・韓国科学技術院、2013年11月1日-2日

橋本雄一、大連の中国語新聞『泰東日報』と植民地都市のトポス、神奈川大学非文字資料研究センター租界メディア班2013年度第2回研究会、神奈川大学非文字文化資料研究センター、2013年7月25日

橋本雄一、1920年中国人の都市大連の使用法と地図作成、研究交流ワークショップ 東アジア近代都市の文化マップ制作をめぐる 大連、ハルビンという歴史空間、東京外国語大学本郷サテライト校舎、2013年3月9日

平石淑子、大連高等法院を訪ねて、研究交流ワークショップ 東アジア近代都市の文化マップ制作をめぐる 大連、ハルビンという歴史空間、東京外国語大学本郷サテライト校舎、2013年3月9日

大久保明男、『大同報』文芸欄と梅娘の初期作品、第8回植民地主義と文学国際学術会議、韓国・延世大学原州キャンパス、2012年8月23日-25日

橋本雄一、メディアと建物 「関東州」大連市庁舎完成をめぐる傅立魚の評論、満洲国文学研究会第21回定例会、日本女子大学目白キャンパス百年館高層棟、2011年12月17日

[図書] (計 7 件)

大久保明男ほか(共著)、帝国以後の人の移動、勉誠出版、2013年、総ページ数 1000p

平石淑子、大久保明男、橋本雄一ほか(共著)、二十世紀満洲歴史事典、吉川弘文堂、2012年、総ページ数 840p
木之内誠、上海歴史ガイドマップ増補改訂版、大修館書店、2011年、総ページ数 252p

[その他]

ホームページ等

Shanghai Historical Map 上海歴史地図

<http://historicalmap2010shanghai.com/>

木之内誠が2011年12月に出版した『上海歴史ガイドマップ』(増補改訂版)の内容の一部に基づいて、これに写真画像と音声を加えてウェブ版として公開した。本課題のウェブ版公開のひな形となりうるもの。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木之内 誠 (KINOUCHI MAKOTO)

首都大学東京・人文科学研究科・教授
研究者番号: 50195327

(2) 研究分担者

平石 淑子 (HIRAISHI YOSHIKO)

日本女子大学・文学部・教授
研究者番号: 90307132

大久保 明男 (OHKUBO AKIO)

首都大学東京・人文科学研究科・准教授
研究者番号: 10341942

橋本 雄一 (HASHIMOTO YUICHI)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号: 30305403